人格形成のための教育：私の実践

津田幸男　社会・国際学群／国際総合学類
人文社会科学研究科現代文化・公共政策専攻教授
（つだ ゆきお／国際コミュニケーション論）

はじめに

わたしの教育はひと言で言って「人格形成のための教育」ということが出来る。「人格」などを持ち出すと、本人はよっぽどの人格者でなければならないが、それは棚に上げておいて、とにかく学生たちの「人格形成」に役立つような教育にしなければならないと常に思っている。

なぜ「人格形成」を中心にした教育をしているのか、そしてそれをそれぞれの担当科目でどう実行しているのかをここで紹介したい。

「個性」ではなく「人格」が重要

「人格」とは「高いモラルを持っていること」と私は考えている。「モラル」とは善悪の判断を正しく出来ることをはじめ、自分を律し、社会や国家という「公」への奉仕の精神を持ち、そして真善美の理想を追求する精神を持っていることをさす。「教養がある」というのは、要するにこのような「高いモラル」、「人格」を備えていることをさす。

現代ではしばしば「個性を伸ばす教育」が叫ばれているが、私は反対である。これは夏目漱石も言っていることであるが、「人格の支配を受けていない個性」というものは、モラルを破り、暴走しがちになる。「個性」とは所詮「私」であり、「個性を伸ばす」となると、「私」がのさばってしまい、ただ単なるわがままが横行して、モラルが育たないことになる。これでは「私中心主義」を促がす教育になってしまう。しかし残念ながら、現在の教育にはこのような傾向が強くある。本当の意味で人間を育てていない。

であるから、「個性をのばす」のではなく、「人格形成」に役立つ教育が重要である。

「知識・情報」ではなく「モラル」が重要

現代の教育のもうひとつの特徴は「知識・情報偏重」であることだ。これも大きな問題である。「知識・情報」のみでは「人格」は育たない。「学問」というものが「知識・情報」の獲得のみという狭いものになっている。「人格」があってこそ「知識・

情報」が生かされることはいうまでもない。

これは「学問」の側に問題がある。最近学問分野の過剰な細分化が進んでおり、ある小さな現象のみを対象とする学者が増えている。すると、学問が、その狭い分野の専門用語をマスターするということのみに陥り、広い視野を持てなくなってしまう。

大学教育では、そのような専門家が教えるので、教育の内容も雰囲気も「知識・情報」に偏ってしまうのである。そして学生たちも錯覚して専門の「知識・情報」を学ぶことが学問だと思ってしまうのである。しかしこれらの「知識・情報」は「人格」を育てるわけではない。現在の大学教育は肝心なところが抜けてしまっているのである。

「人格形成」のための教育の条件

それでは「人格形成」のための教育はいったいどうすればよいのだろうか。「個性」を伸ばすのでもなく、「知識・情報」を伝えるのでもない教育とは、具体的にはどんなことをするのであろうか。

「人格形成」のための教育を考える上で、次の3つの要素が重要である。それは、

1. 教師
2. 教材
3. 教室

である。

それぞれについて少し記しておく。

1. 教師：「人格教育」への情熱を持ち、常に研究を持続する。教室の雰囲気を作る、変える力がある。
2. 教材：「人はいかに生きるべきか」等考えさせる、問題意識を持たせる内容。
3. 教室：学ぶのにふさわしい雰囲気がある場であるべき。立派な教壇と教卓は必須。教室は「人格形成」の場であると学生に自覚させることが重要。

教室について一言付け加えたい。筑波大学の教室のほとんどはあまりにもみすぼらしい。まず雰囲気が悪い。壁はきたないし、全体の雰囲気が薄汚れている。これではよい学習環境とはいえない。学生も教師も気持ちが高揚するような教室作りが急務である。

特に教室には立派な教壇と教卓が必須である。教師は責任ある立場であるので、少し高い所から学生を見つめ、話せる環境を作るべきである。それだけ権威を与えられると、教師も責任が重いので一所懸命教えるはずである。

この3つの要素が充実すれば必ず「人格形成」のためのすばらしい教育になるとは限らないが、この3つの要素は教育の最も重要な土台であると私は考える。この3要素の質を高めることが、より良い「人格形成」のための教育につながるのである。

私の授業

それでは、私が学群・学類において担当している授業について紹介したい。担当科目は「グローバル・コミュニケーション論」「英語教育論」「英語科教育概説Ⅰ」そして共通科目「英語」である。

1. グローバル・コミュニケーション論～映像教材で問題意識をかきたてる

国際総合学類の専門基礎科目として開講している「グローバル・コミュニケーション論」は毎年100名以上の受講者があり、毎年大教室で講義を行なっている。

まず、このような多数の講義でも、全て座席指定にしている。それは「教室」の雰囲気をピリッとしたものにするためである。大人数の学生が講義室のあちこちにバラバラに座っていると教室全体がだらけた雰囲気になってしまうので、座席指定にして教室全体が整然とした雰囲気になるようにしている。事実これはかなり効果がある。また、誰がどこにいるかもわかるので、出欠確認もすぐできるし、学生に質問の指名をすることも出来る。大講義室でも対話形式の講義が可能になる。そして、学生の受講マナー向上にも効果がある。

さて、「教室」の環境を整えたら、次は「教材」である。この講義は2コマ続きなので、はじめのコマはその日のテーマに直結したビデオ教材を見せる。本講義のテーマは「グローバル化」時代における言語・文化・情報・コミュニケーションの諸問題を理解することである。たとえば、「英語支配」というテーマに関しては、私が自前でつくった英語講義のビデオを見せる。そして、ビデオを見せる前に、黒板にビデオの内容に関する質問をいくつか書いておいて、ビデオを見ながら解答するようにという指示を出しておく。ただ漫然とビデオを見るのではなく、考えながら、解答しながらビデオを見るように仕向けるのである。

ビデオ視聴後は、質問に解答させながら、その日のテーマの講義を展開していく。

「グローバル・コミュニケーション論」では、グローバル化の進展による「影」の部分に焦点を当てている。であるから、グローバル・コミュニケーションにおける差別、偏見、不平等、格差の問題をテーマとして取り上げている。特に「英語支配」と「消滅に瀕する言語」の問題には多くの時間を費やしている。これらの問題を学ぶことにより、少数言語やコミュニケーション弱者の立場が理解できる「人格」を身につけてもらえばと願っている。

2. 英語教育論・英語科教育概説Ⅰ～新しい目的意識を持った英語教師の育成

英語教育論は教職科目の英語科教育概説

Ⅰと合併で開講しており、毎年合計で40名ほどの受講者がいる。将来は英語教師になろうと希望している人文・比文・人間・国際総合・その他の学類の学生たちが受講している。

この講義で私は次の2点を強調している。

1. 言語の技術教育ではない人格形成のための英語教育をめざす。

   英語教育は、ややもすると言語技術教育に陥りがちであるが、言語とはそもそも人間を人間たらしめているものであることを考えると、言語教育が技術教育で済むはずがない。「人格形成」につながるような厚みのある内容の英語教育を目指すべきであるし、それが出来る教師を目指せと激励している。

2. アメリカナイゼーションに陥らない英語教育をめざす。

   英語教育は、うっかりするとアメリカやイギリス等を礼賛する教育に陥りがちである。英語や欧米に対するコンプレックスや従属観を植え付けることになりかねない。まず英語教師を志望する学生たちがこれらの点について問題意識を持ち、日本人のアイデンティティーを大事にするような英語教育のあり方をイメージできるよう講義を通してアドバイスしている。

この他、現職の中学高校の英語教師に来てもらい、教育現場の話をうかがって、学校の実態を学生たちが把握できるようにしている。毎年2〜3名の先生たちに来て講義してもらっているが、学校現場の話だけに、学生たちにはかなり好評である。

さらに、レポートを何回か出してもらうが、提出時に必ず英語で要旨を書かせている。簡潔で論理的な英語が書ける力を少しでもつけてもらいたいという狙いでこれをやっている。

教師を目指す学生たちが、ありきたりな先生ではなく、「人格形成」に貢献できるような、そして「アメリカナイゼーション」を突破できるような英語教師に成長することを願って、1年間の講義を私自身もがんばってやっている。

3. 共通科目：英語〜「いかに生きるべきか」を考える

「2. 英語教育論・英語科教育概説Ⅰ」ですでに述べたように、「人格形成」のための英語教育が私の目指すものなので、それを実践している。

この目的のために、この数年、“Tuesdays With Morrie”（「モリー先生との火曜日」）を翻訳本と共にテキストにしている。これは不治の病にかかった大学の先生とその昔の教え子が毎週火曜日に会って、先生が亡くなるまで人生のさまざまなテーマ：「生

と死」「愛」「家族」「結婚」「文化」「金」等について話し合い、「人生の意味」を探求するというドキュメンタリーである。モリー先生はアメリカのブランダイズ大学の社会心理学の先生で実在の人物であり、教え子のミッチ・アルバムがこの本の著者である。そしてこの本は2人の対話の記録である。

死ぬ間際にモリー先生は言う。

“Death ends a life, but not a relationship.”（死で命は終わるが、つながりは終わらない。）

“Once you learn how to die, you learn how to live.”（死がわかれば、生がわかる。）

そして人生の目的については、“Devote yourself to loving others”（人を愛することに捧げよ。）と言い切る。

全編がこのような内容で、一つ一つの章が考えさせるものばかりである。これを読みながら、学生たちは「読書ノート」を作っていき、各章の「要旨」「印象に残った表現」「日英比較」そして「感想」を書き込んでいく。授業では、ノートの内容を発表してもらう。

「読書ノート」を書くのは大変なようだが、大学に入って、これからの人生について色々と考えるこの時期にこの本に取り組むのは彼らの「人格形成」に大きな影響を与えるであろう。そして1年経つと200ページ近くあるペーパーバックを読み終えているのである。英語が苦手な学生も少しは自信をつけるのではないかと思う。

終わりに

「人格形成」のための教育などと大言壮語した感があるが、教育とはやはり人を育てるものだと思う。学生たちの人間性向上、しっかりとしたモラルの土台を築けるように導くのが私たち教師の仕事であると信じている。これをやり通すのは教える側の情熱と使命感が必須である。それを持ち続けられる限りは教壇に立てるのではないかと思っている。